

19ー1 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり 「錦帯橋の再生と覚悟のものがたり」

〈1〉錦帯橋



皆様、こんにちは。

ご紹介を頂きました吉川重幹でございます。

本日は、世界文化遺産登録を目指している錦帯橋の歴史や価値について、少しでもお話をさせて頂きたいと思います。

錦帯橋の歴史・価値については、皆様、既によくご存じのことと思いますので、本日は、錦帯橋がいに創建されたのか、また再建されたのか、その歴史的背景、更には、当時の人たちの思いや覚悟などを含めお話しさせて頂きたいと思います。

〈2〉吉川元春公



吉川元春の江戸時代に描かれた肖像画です。

まずは岩国・吉川藩の成立についてです。今年のNHK大河ドラマは「麒麟がくる」ですね。ご覧になっていますでしょうか？主人公は智将・明智光秀(参考1528～82年)です。やがて光秀は織田信長を討つわけですが、この光秀とほぼ同時代を生きたのが、毛利元就の次男・吉川元春(参考1530～86年)です。

〈3〉関ヶ原の合戦



元春の子、広家の時代、慶長5年(1600年)に天下分け目の「関ヶ原の合戦」があります。家康率いる東軍の勝利をあらかじめ見越していた広家は、西軍側について敗北すれば、領土を失うと考えていました。

〈4〉関ヶ原合戦布陣図



ところが、宗家の毛利輝元が西軍総大将に担がれて大坂城に入っていたため、やむなく広家は西軍に属しながら、徳川方と「毛利軍が兵を動かさない代わりに毛利の所領を安堵する」との密約を交わします。

毛利秀元率いる毛利軍は、東軍を後方から攻め挟み撃ちにできる「南宮山」に布陣し、広家は、合戦が始まってからも約束通り軍を動かさず、結果的に、毛利本隊を参戦させませんでした。ところが、戦いの後、毛利輝元が積極的に西軍総大将として働いていたという証が見つかり、輝元は責任を問われます。

家康は毛利を許さず、所領をすべて取り上げて吉川家に周防・長門の2か国を与えようと言います。しかし、それでは、宗家を大事に思う広家の立場が失われます。広家は、懸命に毛利家の存続を嘆願し、毛利家は防長2州に減封された上、存続が許されます。

〈5〉長州藩内の領地



この経緯から、広家は、毛利藩内において微妙な立場に立たされます。毛利家臣団の中には、もし、毛利軍が戦っていたら、西軍に勝機があったと考える者が少なからず居たからです。その為広家は、自ら希望して東方最前線にある岩国に入府し、事あらば毛利のために真っ先に戦う意思を示したものと考えられます。吉川家も出雲の国など14万石から、岩国3万石へと国替えですから大リストラし、家臣の三分之一を従えて移ってきました。

〈6〉吉川広家公



ふたたび、いつ戦(いくさ)になるのか、わからない緊張感の中で広家による岩国の国づくりが始まります。岩国初代となった広家は、横山を政務の中心とします。東方に向かって錦川をはさみ、山を背負う形で防衛にとっても適していたからです。

19-3 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり

〈7〉現在の岩国城



現在の岩国城

さらに広家は、城づくりを急がせます。着工したのは、広家が岩国に入った慶長6年(1601年)。関ヶ原の翌年です。1608年に竣工した城は、戦後に再建された現在の城の位置よりも少し北側にあり、小瀬川を渡ってくるだろう、敵軍の侵入路となる関戸方面ににらみを利かせていたわけです。

ところが、この城は完成からわずか7年後に幕府の一国一城令によって破却されるのです。

やがて幕藩体制がととのって、平和な時代が訪れるのですが、武家の常として戦乱に備えるという意識があったでしょう。表面的には平和になっても、国防を忘れてはいけません。城を失った中で、せめて立派な城門橋をつくりたいと考えていたのではないのでしょうか。

〈8〉錦川



豊かな水量をたたえて
流れる錦川

ところが、これがなかなか厄介なのです。天然の堀の代わりとなっていた錦川は、中国山地の雨水を集めた豊かな水量を誇る大河です。現在よりも水量はかなり多く、ひとたび暴れると、橋など、簡単に押し流してしまいます。

〈9〉増水した錦川



雨天時、増水した錦川

岩国初代・広家の子である2代・広正の時代にも橋が架けられましたが、梅雨や台風の洪水で何度も流されています。その様子を3代の広嘉がみています。

19-4 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり

〈10〉吉川広家展のチラシ



洪水に流れない橋を作るには、水面から高さのある橋を架ければよいことは分かっています。

しかし、錦川は川幅が広く、普通の橋ではたちまち流されてしまうことは、痛いほど経験しています。ここに橋を架けることはきわめて難しく、広家以来、岩国吉川3代にわたる宿願、悲願だったのです。

〈11〉岩国領図



岩国移封当時、吉川家は経済的に大変困窮しておりました。石高が、ほぼ5分の1となりましたから、かなりの財政逼迫状態となっていたことでしょう。その困難を、家臣・領民が一丸となって克服していくのです。

戦国時代の武将は、戦(いくさ)ばかりやっていたわけではなく、土木技術を習得し、それを戦や国づくりに活かしていました。戦いに明け暮れた戦国時代に、日本の土木技術は飛躍的に発展しています。城や砦、要塞の築造、攻防戦では工兵の技術が勝敗を左右したのです。

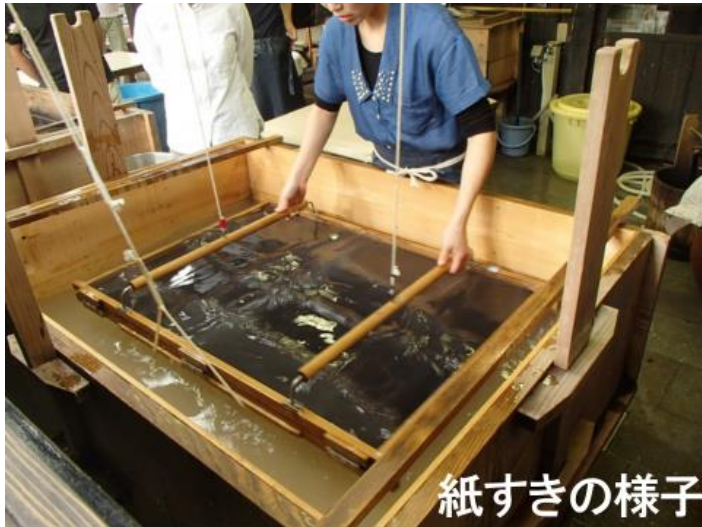
特に羽柴秀吉は、この面で優れ、土木築城の得意な配下の者達を多数抱えていました。有名な加藤清正も城づくりの達人です。広家も、領地経営に優れた才能を発揮し、広嘉までの3代で、岩国領(岩国藩)は新田開発や商工業の奨励で、財政基盤を確立していきます。

新田開発では干拓事業に力を入れて取り組み、現在の岩国の中心市街地一帯は、江戸時代にはほぼ形成されたと言ってもよいでしょう。

さらに、藩の財政を支えたものがあります。それは「岩国紙」です。

19ー5 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり

〈12〉和紙をすく様子

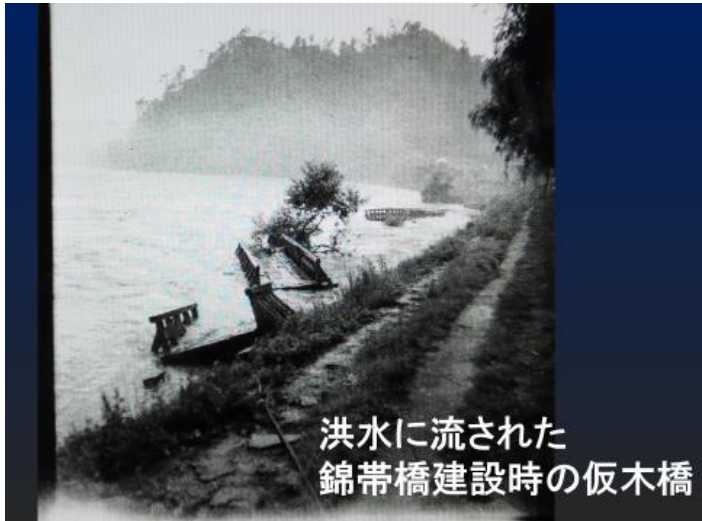


もともと岩国の領地は平地が少なく、山間部が多いのですが、その山の斜面に楮、三桮といった、和紙の材料となる植物を栽培し、藩の主導で高級紙を生産するのです。マイナスをプラスに転じる手法ですね。

「岩国紙」は江戸や京、大坂で高く評価され、浄瑠璃や歌舞伎の作者だった近松門左衛門も、岩国紙を好んだと伝えられています。

そうした財政力が背景にあって、錦帯橋の創建に結びついていくのです。

〈13〉洪水に流された橋



さて、平和な世の中になり、経済も安定してきます。しかし、岩国にとって洪水に流されない橋というのは、何としても実現したい大きな悲願となるのです。

万治2年(1659年)に、父・広正が架けた橋が創建からわずか2年で流されたのを見て、広嘉は新しい橋の構想をめぐらせ始めました。

〈14〉広嘉公と岩国城

広嘉公と岩国城天守閣



広嘉は兵法研究や科学的探究に大変熱心な人物でした。家臣の中から発明や創意工夫に長けた者を重用し、水上歩行具なども作らせています。さらに、新しい橋の原形となる模型も作らせています。

19ー6 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり 〈15〉錦川の渡し舟



広嘉の頭の中には、常に橋のことがあります。橋がなくても、渡し舟で錦川を行き来することはできます。しかし、ひとたび洪水となると、手がつけられないほどの暴れ川となるため、何日も川を渡ることができずに城下は不便を極めるのです。その頃は錦川ではなく、大川と呼んでいたようですが、この川をまたぐ橋を架けることは岩国・吉川3代の大きな夢でした。

〈16〉岩国領の政庁だった御土居



領地経営の中心となっていたのは、横山の居館（御土居）です。いまは吉香神社、錦雲閣などがあるあたりですね。ここに藩主（領主）をはじめ、行政に当たる家臣たちが詰めています。領内に異変があれば、いついかなるときであっても、ここからすぐに駆けつけなくてはなりません。

〈17〉但馬出石城の城門橋



これは但馬の国、出石城（いずしじょう）の城門橋です。一般に城には周囲に巡らせた堀を越える城門橋があります。岩国藩は、いわば城門橋の役割を果たす橋を壮大な規模で架けなければなりませんでした。これが、どれほどの難事業であったか。国内には前例がないのです。

19ー7 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり

〈18〉甲斐の猿橋



これは甲斐の国・山梨県大月市に架かっている「猿橋」です。錦帯橋と共に日本三奇橋のひとつとなっている橋で、錦帯橋よりも以前に架けられています。川の兩岸から猿が弓のように連なって橋を造って渡ったという様子を、ヒントに作られたと伝えられています。

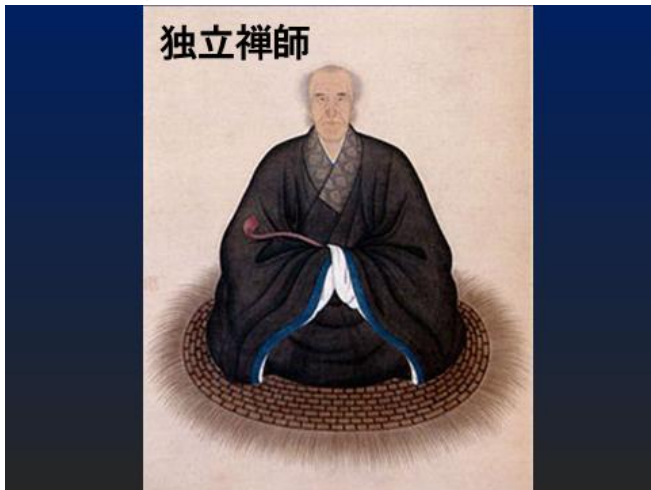
なるほど、この刎ね橋構造であれば、川に橋脚を持たないため、少々増水にも影響を受けることはないでしょう。しかし、この猿橋が架かっているのは溪谷であり、錦川は川幅が広いのです。

その難題を突破するには、新しい知恵と発想が必要でした。

広嘉は、お側大工だった児玉吉兵衛の次男だった九郎右衛門(くろうえもん)に目をつけます。広嘉より、14歳年下で、まだ実績のない部屋住みの青年大工だった若者を一大事業の要に抜擢するのです。

広嘉は、経験や実績のある棟梁のみに任せていては、まったく新しい構造による革新的な橋はできないと考えたようです。若者を起用した上、各地で学ばせて視野を広げさせました。壮大な構想を実現させるには適切な人材の登用と育成が肝心なのです。

〈19〉独立禅師

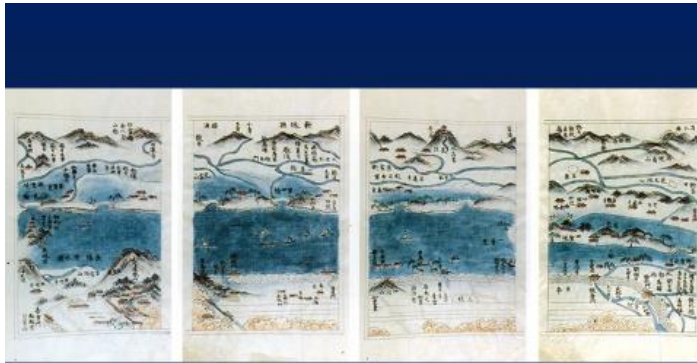


その知恵のヒントは、時として外部からもたらされることもあります。寛文5年(1665年)に家督を継いで3代藩主(領主)となった広嘉は、いよいよ領内の衆知を結集して新しい橋の研究に本格的に乗り出します。

その頃、運命的な出あいがありました。それは、父・広正と広嘉の病気治療のため、何度も岩国を訪れていた、明からの亡命僧である独立性易(どくりゅう・しょうえき)です。独立禅師が所持していた、ふるさと・杭州市(こうしゅうし)の景勝地、西湖(せいこ)の絵図面から、広嘉は橋づくりの大きな発想のヒントを得るのです。寛文4年(1664年)のことでした。

19-8 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり

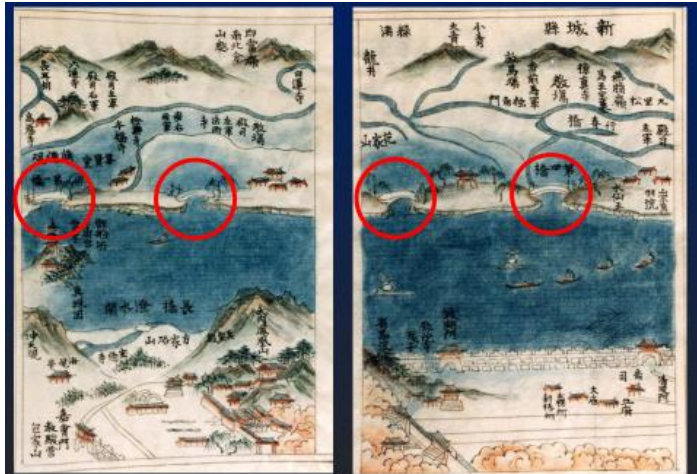
▼画面〈20〉西湖遊覧志



「西湖遊覧志」の絵図面

広嘉が目にしたのは、西湖という湖の小さな島伝いに、弓なり状の石橋が連なるように架けられた絵です。洪水にも流れない橋の発想の重要な手がかりのひとつは、まさにそこにあったのです。西湖は湖ですから、洪水で橋が流れるわけもなく、絵は、ただ半円構造の石橋が並んでいるだけでしたが、そこに錦帯橋の着想を得た広嘉の感性は、やはり素晴らしいものだったといわなければなりません。

▼画面〈21〉西湖遊覧志の絵図面

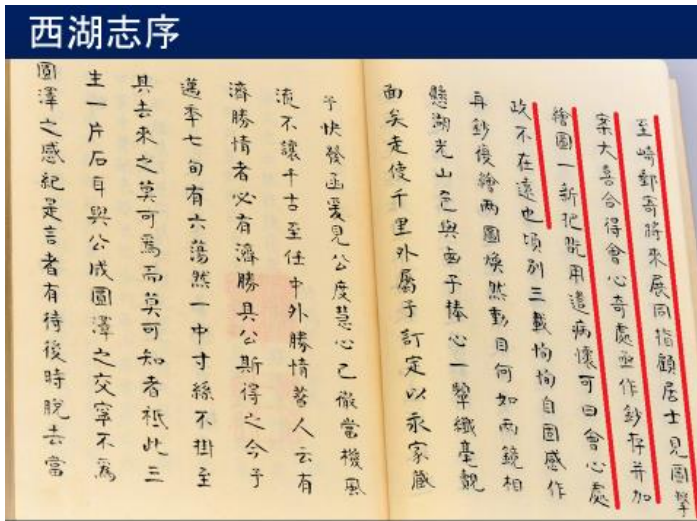


「西湖遊覧志」の絵図面

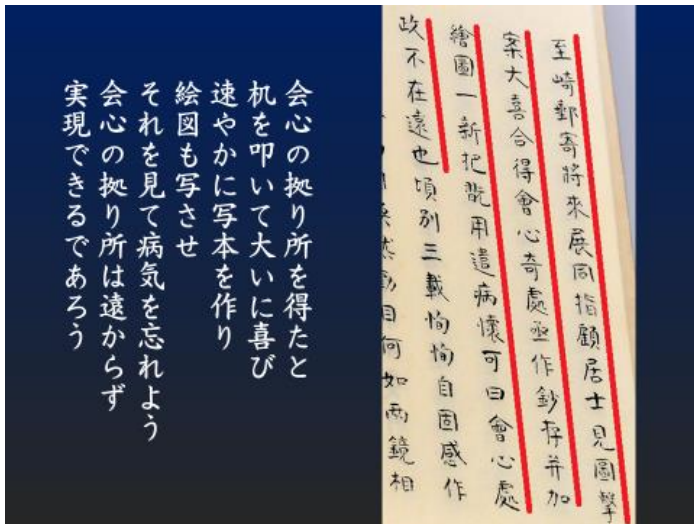
工学的にも優れた着眼点でした。そうか。錦川に小島を並べて、そこに橋を架けるか…。今でこそ、錦帯橋の合理的な構造は理解されていますが、普通、西湖の絵図面から錦帯橋発想のヒントを得ることはなかなか難しいことでしょう。

この頃、独立は広嘉から、膨大な蔵書を見せられて驚いています。広嘉の博識ぶりは群を抜いていたのです。そうして蓄積していた知識の中で、洪水に流れない橋の構造がひらめいたといえるでしょう。

▼画面〈22〉西湖志序



その様子は、西湖遊覧志写本の巻頭に独立自筆の題辞があり、その中に見ることが出来ます。



独立は、長崎から届いた西湖遊覧志の絵図を見た広嘉が「会心の拠り所を得たと机を叩いて大いに喜び、速やかに写本を作り、絵図も写させ、それを見て病気を忘れよう。会心の拠り所は遠からず実現できるであろう」と言ったと記しています。

〈24〉錦帯橋の橋台



錦帯橋は木造りの技術だけでなく、石造りの技術、巻き金として使った鉄の技術を組み合わせた木と石、そして鉄の技術の結晶体です。それは、まさに城造りと同じでした。優れた城を建造する技術、それを使いこなす集団がいればこそ、完成させることができたのです。

これは、小島として造った橋台（橋脚）を上流側から撮った写真です。上流に向けて先端をとがらせ、流れを切っていく構造です。そうです、船のへさきと同じですね。こうした細かな発想や着眼の積み重ねが、錦帯橋の元になっていくのです。

〈25〉広嘉銅像と児玉九郎右衛門



左が広嘉の銅像。そして右が児玉九郎右衛門のイメージ像です。

次の時代を切り開いていくには、優れた指導力と着眼力、決断力を持つリーダー、そしてリーダーの期待に応えて、さまざまな障害や困難を乗り越えていく人たちの力の結集が必要です。

錦帯橋は創建までに、そうした人間たちのさまざまなドラマがあったわけです。広嘉の覚悟と新しい知識との出逢い、適した人材の登用などがありました。

〈26〉錦帯橋



こうして完成した錦帯橋ですが、優れた機能を持つ建造物は、美しさを第一に求めたわけではないのに、景観としても大変優れたものを備えています。

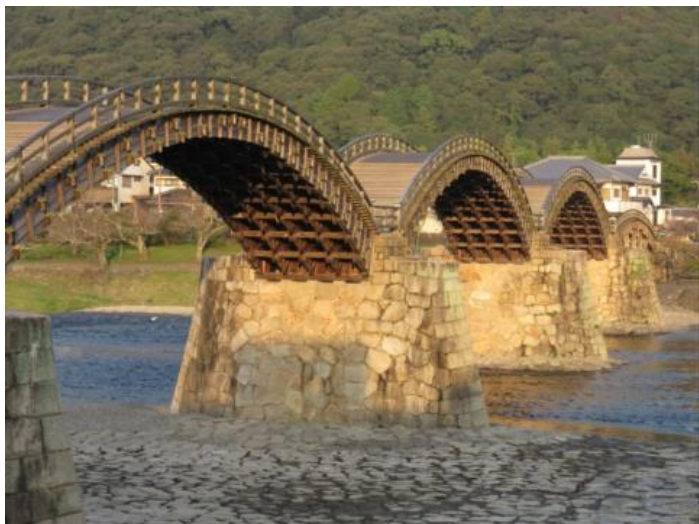
木材は、石と同じ強度は得られませんが、桁(けた)、楔(くさび)、梁(はり)、棟木(むなぎ)などを材料として組み合わせることによって、独特の柔軟性を備えたアーチ構造が形成されます。1橋が35・1メートルというのは、木造としては破格に長い径間(わたりま)です。無駄をそぎ落とさないと、実現は不可能です。

〈27〉錦帯橋と狐ヶ崎の太刀



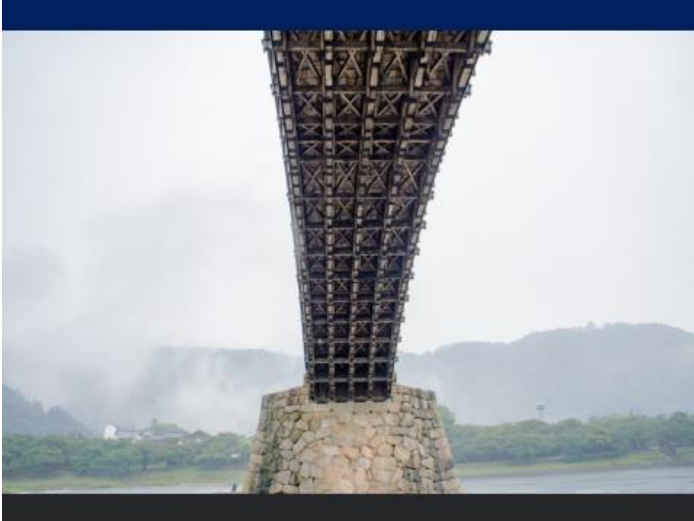
武士が用いる日本の太刀も、機能を追求した結果、極めて美しい反りの形を持つようになります。錦帯橋を横から眺めると、太刀にも見えますね。この上に映っているのは、吉川家が家宝として大切に継承して参りました国宝「狐ヶ崎の太刀」です。錦帯橋は、鎌倉時代から伝わる武家の魂ともいえる太刀と共通する美しさを備えていると言えるのではないのでしょうか。

〈28〉錦帯橋



錦帯橋は、人が歩く上部は平坦でとてもシンプルです。しかし、これを下から見ると、びっくりするほど複雑な構造であることがわかります。その鮮やかな対比も、錦帯橋の魅力ですね。

〈29〉錦帯橋下部の姿



この裏面の複雑な構造から、錦帯橋を「そろばん橋」と呼んだりもしますね。見る角度を変えるだけで、これほど印象がガラリと変化する橋を知りません。何度見ても飽きないと言われるゆえんでしょう。

〈30〉洪水の中の錦帯橋



錦帯橋が創建された翌年の延宝2年(1674年)5月28日、梅雨時期の洪水で増水した錦川は錦帯橋の橋台を破壊し、中央の3橋が崩れ落ちて橋は流失します。

完成から、わずか8か月後のことです。

洪水に強いはずの錦帯橋が、こうも簡単に流れてしまうとは、何としたことか。広嘉をはじめ、家臣や領民たちは、さぞ、落胆したことでしょう。

この画像は、昭和25年9月14日、戦後のキジア台風による流失時の様子ですが、橋台は完全に流れにのまれていきますね。そこから、上部にある橋は流れから逃れ、耐えに耐えています。

〈31〉樽を載せた錦帯橋



錦帯橋というのは、上に重量を架けると、さらに全体が引き締まって強度が増すのです。ですから、洪水時には橋の上に樽を載せ、この中に水を入れて重し代わりとしました。

この写真は、キジア台風の時、消防団の方が命がけで錦帯橋に載せた大樽にホースで水を注いでいるところです。

しかし、こうした努力もむなしく、錦帯橋は流れました。

〈32〉崩れ落ちた錦帯橋



長年の努力と歳月、資材、労力を用いて、ようやく完成した橋は、まったくむざんな姿に変わりました。こうした事態に陥ると、いまの時代もそうですが、「責任者出て来い！」となるわけです。

当然、児玉九郎右衛門も青ざめたと思います。九郎右衛門は渡り初め、そして完成後の慰労の宴では、大変な名誉を受けているのです。破格の待遇で栄誉を授かりながら、8か月で橋が崩落するとは、「落胆」という言葉だけでは、おさまらない出来事です。

〈33〉広嘉公の銅像



ところが、広嘉はいかなる行動と決断を示したか。流失から、わずか3日後、水がひいたとたんに橋の再建令を出すのです。

現代ではありえない決断でしょう。まずは原因の究明を長期間かけて慎重に行うはずですが、再建のための資材や資金も集めなくてはなりません。しかし、広嘉は間髪いれずに「再建せよ」という身震いするような覚悟を示すわけです。

さらに架橋した者たちの責任を問うことなく、叱責もしていません。

当時の岩国藩のすごいところは、すぐに再建できるだけの財力、人材、材料、そしてやる気、覚悟を備えていたことです。

広嘉の覚悟と熱意に、架橋に当たる役人や大工たちは奮い立ちます。その顔ぶれは創建時とほとんど同じです。

一度の失敗に屈することなく、恐れることなく、むしゃぶりつくように、橋をふたたび架けていくのです。

ちなみに、錦帯橋が創建時にかけた期間は延宝元年(1673年)6月28日に橋台の鉄入れによって始まり、同年の9月30日の夜中までのわずか3か月間でした。

台風襲来の季節までに仕上げたいという理由があったにせよ、重機もない時代に、まったく驚異的な速度です。相当の準備をしたうえで、一気に架けたのでしょうが、とてつもないことです。

そして再建には、5か月かかっています。創建時に比べて、材木などの準備に時間がかかったのでしょう。それでも、現代においても信じられないほどのハイスピードです。

19ー13 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり

〈34〉現在の錦帯橋の敷石



おそれいるのは、架橋に当たった者たちが、石組みの橋台がなぜ崩壊したのか、たちまち原因を見抜き、突き止めたことです。すぐに対策を施します。

彼らは原因を探っていくうち、横山側の橋台がただひとつ無事だったことに着目しました。橋台の設計仕様はいずれも同じでしたが、無事だった橋台周辺の敷石だけが剥がれずに残っていたのです。

この敷石が、大水で掘られることで、橋台が不安定になるのです。地味で目立たない箇所ですが、この敷石こそが、錦帯橋を守る生命線だったのです。

〈35〉戦後の流失後の錦帯橋再建工事



このため、錦帯橋の再建工事では橋台と敷石の強化に念を入れました。橋の上下30間(54メートル)にわたって敷石を敷き詰めております。

その後も、錦帯橋は度々の改良や補強、補修、定期的な架け替えを繰り返しながら、昭和25年のキジア台風まで、実に276年間にわたって優美な姿を保ち続けてきたのです。

〈36〉昭和27年の再建時の錦帯橋



錦帯橋は、広嘉の命を受けて、失敗を恐れず、画期的な手法で、誰も見たことのない橋を手がけた、児玉九郎右衛門を始め世界に誇る技術者たちの、「技の結晶体」といえるでしょう。

〈37〉錦帯橋の夜景



しかし、完成したら、それで良いというわけではありません。岩国藩は再建後の錦帯橋の維持管理に細心の注意をはらい、橋の両側には橋守（はしもり）を置きました。管理や清掃だけでなく、小規模な修理も受け持つ橋守には大工職が充てられ、毎日細やかに点検し、適切に小修理を繰り返してきたことが長期にわたって流れない橋を支えたのです。

創建した橋が流れた原因からかんがみて、とりわけ敷石の管理と補修は厳格なものとししました。膨大な敷石を河床に配置したことで、橋の上流や下流は、鰻やナマズなどの絶好のすみかとなりましたが、ここでの釣りや漁を禁じています。漁によって敷石がはがれたり、動くことを恐れたのですね。橋台に舟をつなぐことも禁じています。錨を投じて舟をとめると、敷石を動かすことになると思ったのです。

〈38〉錦帯橋の四季



ここで錦帯橋の美しさについて、改めてご紹介しましょう。よく言われるのは、その景観が24時間365日間、刻々と変わっていくことです。春は桜が満開、梅雨時の川霧はまるで山水画のようです。

〈39〉夏の錦帯橋



夏には、花火大会があります。そして鵜飼は広嘉の時代から行われていたものが、復興したものです。日本各地に鵜飼がありますが、錦帯橋上流で行われる鵜飼は見どころたっぷりです。

〈40〉紅葉と雪



秋は燃えるような真っ赤な紅葉、冬は真綿のような雪景色となります。ただ、このところの暖冬で、雪景色を見ることは、貴重になっておりますね。

〈41〉大名行列



錦帯橋まつりも、多くの市民が参加して盛り上がり、大名行列や奴道中が行われます。

〈42〉南条踊りと鉄砲隊



南条踊り、岩国藩鉄砲隊の勇壮な演武なども見応えがあります。岩国が誇る時代絵巻ですが、錦帯橋を中心に、市民の熱い思いがあればこそ、なりたつ行事です。ありがたいことですね。

〈43〉生活道としての錦帯橋



観光用としてだけでなく、錦帯橋は生活道でもあります。かつて岩国高校が横山にあったときは多くの学生たちが、錦帯橋をわたって学校に通いました。いまでも児童生徒たちが渡っています。市民生活の中にも錦帯橋はしっかりと溶け込んでいるわけですね。

〈44〉錦帯橋での結婚式



若い人の中には、結婚式後にふたりの人生の最初の門出の儀式として錦帯橋を渡ったりしています。大変、うれしいことです。

〈45〉錦帯橋の絶景



こうして市民の暮らしの中に欠かせない風景となった錦帯橋ですが、私たちには、この錦帯橋の景観を未来に伝えていく責任があります。

残念ながら、戦後の昭和25年(1950年)にキジア台風による洪水で錦帯橋は流れています。このとき、なぜ錦帯橋は流れてしまったのでしょうか。戦後の混乱期に敷石の大切さ、そして敷石を守る河川敷の大切さが、忘れられてしまったという反省の声を聞きます。

やはり、創建以来の長い歴史を踏まえながら守っていく取り組みを、次世代にきちんと伝える作業を、地道に続ける必要性を感じます。

〈46〉錦帯橋と岩国城



本日の話をまとめましょう。

岩国3代の広嘉の柔軟な発想、そして明の僧・独立がもちこんだ「西湖遊覧志」の絵図から得た着眼、知識の融合。思い切った若手の登用による「イノベーション」といえる技術革新、城は破却されましたが、その屈辱を晴らすかのように錦帯橋で示した岩国藩の技術的・経済的存在感、さらに驚くべき江戸時代の土木建築技術とマンパワーが発揮されたことも強調したいところです。

吉川家は優秀な土木建築技術集団を抱えており、天下が統一され、世の中が安定した江戸時代には、その技術と知識が農作地の開拓や改良に使われ、岩国藩は領内の石高を3万石から6万石へと高め、財政力を蓄え、そうして得た財源や技術を錦帯橋創建に惜しげもなく投じたのです。創建や再建にあたっては領内の人々から、多くの寄進と労力の提供があったことも付け加えたいと思います。それにしても、当時の日本人の身体能力、築造能力、計算能力、精神性の高さは驚くばかりです。そして、それらを束ねて錦帯橋を創建し、さらに再建で指揮をふるった広嘉の胆力と覚悟、それに応えて奮い立った人々の姿に強い感銘を受けます。

19—18 錦帯橋の再生と覚悟のものがたり

〈47〉錦帯橋



キジア台風で錦帯橋が流れたとき、国からはコンクリート橋で架け替える話も出たそうです。それを岩国の皆さんは、「とんでもないことだ」と、はねかえし、元の優美な姿を持つ錦帯橋が再建されました。

宮島と錦帯橋、萩



岩国の東には「人と神々が共に生きる島」として宮島、西には「明治日本の産業革命遺産」である萩があります。錦帯橋が世界遺産になれば、世界遺産ルートがつながるのです。

いま、岩国市では官民をあげて錦帯橋を世界文化遺産にする運動が進められています。皆々様方にもお力添えをいただき、どうか実現がかなうように願っています。

ただし、世界遺産は目的ではなく、後世に残していく手段のひとつであり、あくまでも、技術と創建時の精神を未来に伝承していくことこそが目的でなくてはならないと考えます。

そのためには、日頃の点検や補修にとどまらず、一定期間をおいての定期的な架け替え事業も確かな技術を伝承するために欠かせない取り組みでしょう。

錦帯橋から私たちが学べることは数多くあります。とりわけ、創建時の大きな苦労がありますが、流失すれば、何度も再生を繰り返してきたこと、その折に人々が勇気を奮って示した確かな覚悟は、若い方にもぜひにも伝えたいと思うわけです。大切な岩国の「ものがたり」ですね。

伝承や再建事業を通じて、市民が一丸となることで地域がさらにまとまり、より良き、誇り高き「ふるさと」を形成していくことができると、私は信じております。

〈49〉終わり



本日は、ご清聴、まことにありがとうございました。

錦帯橋の世界遺産への道は、現状ではなかなか厳しいようです。実現には大きな政治力が必要です。さらに、それよりも大切なことは市民、住民の錦帯橋への熱い思いの醸成です。

錦帯橋への思いは、やはり錦帯橋について歴史や経緯を知ることではか、深めることはできないようです。

そうした中、岩国吉川会の再発見委員会での取り組みは、岩国の小学生や中学生、さらに昨年は岩国基地のペリースクールの生徒たちを対象に、錦帯橋にまつわる壁新聞や作文、絵画を制作してもらい、大きな成果を上げています。

子供たちが、純真なまなざしで示す錦帯橋への思いは、大人の心を揺り動かす力があります。これから未来を担う、子供たちにしっかりと錦帯橋の歴史を伝えていきたいと考えています。